

2026 年 7 月 31 日（金）開催 学術情報流通に関する連続セミナー 第 14 回

「英語の本、日本語の本：学術書出版プロセスの比較と私見」

当日取り上げられなかった質問への回答（一部）

質問 1

原稿（英語）の執筆とブックプロポーザルの提出に関して、どちらが先行することが多いのでしょうか。研究論文が手元にあれば原稿の執筆は進められると思いますが、編集者の意向や認識のずれなどで大幅な修正が必要であれば、プロポーザルが受領されてから執筆の方が効率的なののでしょうか。また実態はどういったものなのでしょうか。

回答 1

一般的には、既に研究の目途がついて、原稿もそれなりに準備できている段階になって初めてプロポーザルを提出すると思うので、プロポーザルはあるが原稿はない、という状態は考えにくいかと思います。日本とは異なり、企画書を提出してから執筆に取り掛かる、ということはほとんどありません。原稿がゼロの状態でもプロポーザルを出しても、「じゃあ原稿ができたなら査読に回したいので出してください」となって仕切り直しになるだけなので、少なくともサンプルチャプターとして 2-3 章ほど出せる状態でプロポーザルを提出するのが通常かと思います。また、編集者の意向によって原稿が大幅に修正になる、ということもありないのではないかと思います。英語圏の編集者は日本よりも受け身で、持ち込まれたプロジェクトが○か×かという判断をする役割に留まり、内容面に立ち入るのは査読者の仕事になります。

質問 2

英語圏のネットワークに入れないことが英語出版を阻む原因の 1 つになっているということに驚きました。言語の壁は AI の発達によって下がっているように思いますが、ネットワークの要因を緩和するような要素は何か考えられるでしょうか？

回答 2

個人的にはあまり考えにくいのではないかと思います。ネットワークがどう形成されているかという、やはり同じ環境に身を置いた経験とか、対人のコミュニケーションで気が合うといったことがきっかけになっており、もちろん論文の執筆を通じたやり取りというのは重要ですが、それでネットワークが形成されるというほど単純な話ではないというのが実感です。ネットワークがそういった生身の人間の間のコミュニケーションによって成り立っている以上、AI では代替できないのではないのでしょうか。我々全員が、AI を使って会話を試みてくる人間に忌避感や嫌悪感を覚えない世の中になれば、また別ですが・・・

質問 3

日本の社会学系では、若手研究者が日本国内でアカデミックなキャリアを目指していく場合、必ずしも「英語で学術書を出版すること」は必須ではないようにも見えます。今後も日本ではこのようなローカルなアカデミック文化が続いていけるのでしょうか？

回答 3

「社会学系」と書かれていますが、「社会科学系」のことでしょうか？私は政治学研究者ですので、後者の前提でお話しますが、日本では、例えば科研費の出版助成がなくなっ博論本が出せなくなったりしない限り、日本語の本だけを出してキャリアを築いていくことは今後も十分可能なのではないかと想像します。（今のところ）十分な市場規模があるというのもそうですが、（クオリティコントロールが出来ている）英語での学術書出版は、一部の商業出版を除いて世界的にそもそもかなりパイが限られているため、英語でないと業績にならない、というシステムはなかなか機能しにくいと考えるのが理由の 1 つです。

質問 4

出版までの道のりの3年という長さに驚きました。人文社会学分野の方々にとって、その後のキャリアのために通らざるを得ない道なのでしょうが、その間の職や生活の不安はないものなのでしょうか？英国ではそのあたりの若手研究者サポート制度が充実していたりするのでしょうか。

回答 4

出版までの道のりは3年でもかなり早い方なのですが、それまで何も出さないわけではなく、本の内容の一部を論文にして発表し、その業績でポスドクや lecturer/assistant professor の職を得ることは可能です。また、本がまだ出ていなくても、出版契約さえ取れていれば既に出たのと同様の業績になるため、3年待たないと業績が出ない、というわけではないことにはご注意ください。

イギリスでのサポート体制については、端的に言ってまったく充実していません！業績が出るまでの間は、何とかポスドクを見つけて食いつなぐというのが普通で、その間は1-3年毎に所属が変わる、非常に不安定な状態に置かれます。「海外」と言うとアメリカ（のトップスクール）と比較しがちですが、イギリスに限らず、ヨーロッパの人文社会科学系就職市場はこのような死屍累々の状態です（社会科学は人文科学よりもまだマシ）。とはいえ、生存者バイアスかもしれませんが、同じ大学院に行った仲間を見ていると、意外と何とかなっている、と感じるのも確かです。